
It is by you

種原美穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

It is by you

【Nコード】

N7875D

【作者名】

種原美穂

【あらすじ】

幸せで満たされていた僕と彼女。しかし、彼女が交通事故に遭い、記憶喪失になる。しかし、失ったのは「僕」の記憶だけだった。

彼女はいつものように笑った。

僕に向かって、笑った。

僕も彼女につられて笑顔になる。

彼女はいつだって笑っていた。

けれど……。

その彼女がある日、いなくなってしまった。

彼女の脳裏から、僕という存在は消えてしまった。

僕がまだ彼女の脳裏にいた時、彼女はいつだって笑っていた。絶えることなく、僕に笑い続けた。

まるで幸せで満たされているかのように。

彼女はいつだって笑っていた。

今思えば、あの運命の日を予知していたかのように。そのことを承知の上で、彼女は笑いつづけていたのかもしれない。

気づいても、もう遅いのに。

彼女からはもう、僕の実在はないのだから。

遠い遠い昔のように思えてくる彼女の笑顔。

彼女はそのことを予知していたのだろうか？

だから彼女は僕に向かって笑いつづけていたのだろうか？

「わたしのこと、忘れないで」って言っているみたいに……。

「……やっと、わたしのこと、名前で呼んでくれたね」

彼女が大型車と接触した。彼女は数メートルも吹き飛ばされていた。眼前でその出来事を見た僕は、とても大きな衝撃を受けた。

だって、彼女は血まみれになっていたから。

「名前で呼んでくれたね」が彼女の最期の言葉だ、ていつのかよ。

僕はすぐに彼女のもとへ走る。

「おいっ！」

「ねえ……」

彼女の血まみれの手が僕の頬を触る。

僕の頬に血が付着する。

「せつかく、呼んでくれたのに……」

愛しそくに、細い目で僕を見つめる彼女。

「『愛梨』で……」

彼女……愛梨は、最後まで僕を見つめて。

そして僕の頬を触っていた腕が、するりと落ちていく。

彼女の瞳もまぶたを閉じていた。

「え………？」

彼女の手を握り締める。微かに冷たい感触がある。

僕の全身が震えた。

「名前、呼んであげたから……」

必死で彼女に呼びかける。

例え、無駄だとしても。

「僕の名前も呼べよ………！！」

返答は来なかった。

「う………うう……」

人生で初めて、

「うわあああああっつ！……！！」

彼女のこと、泣き叫んだ。

早く救急車で運ばなかったのが悪かったのか、彼女は集中治療室に運ばれ、手術を受けた。一命を取り留めた。

僕は走って、彼女のいる病室へと向かった。

ドアを開ける。そこには、包帯を巻いている彼女のすがただけがあった。

「……………あ」

彼女との再会に、思わず言葉が零れる。色々と言葉が出るのに、心の中で感情が溢れ出して、うまく話すことができない。

そして、彼女は口を開いた。

何を言うのだろう。

「——誰、ですか？」

一瞬、時が止まった、……………気がした。

彼女が何を言っているのか、わからなかった。

僕のことを「誰ですか？」と、言った？

それがどうしてなのか。僕には理解できない。

幻聴でありたい。僕の聞き間違いであることを、願いたい。

しかし、次の瞬間に、その願いは打ち破られた。

「黒崎愛梨さんは、記憶の一部を失くしています。記憶喪失というものでしょう。しかも、その記憶の対象が、あなたなんですよ」

「——え」

いつの間にか、病室のドア付近に、医師と看護師がいた。

「それって……………どういう意味なんですか？」

「そのままの意味ですよ。一部だけの記憶喪失。稀に見ない貴重なケースです」

「どうして……………僕の記憶だけが、消えたんですか？」

「原因は現在も解明しようと尽力しています。しかし、まだ解明さ

れてはいません」

「……僕のことを、思い出してくれるんですか？」
その質問の答えを聞くのが――怖かった。

「無理でしょう」

神様は意地悪だ。いつだって、僕に対して意地悪だ。
どうして「僕」だけの記憶を、彼女は失ってしまったのか。
僕には……理解できない。

体力が回復し、学校生活が送れるくらいまでに彼女は回復した。
彼女は病院を退院し、学校生活を送るようになった。

「ああー！愛梨。おひさー！元気だった？」

学校に登校するなり、久しぶりの教室に驚いた表情をみせた彼女
だったが、すぐに思い出したらしく、すぐにクラスメートと馴染ん
でいった。

しかし、僕にとっては違う日常。

彼女は、僕と付き合っていた記憶など、欠片もないのだから。
時々、僕のことを見つめたが、彼女は僕に向かって笑うことはな
かった。

例え愛情がなくてもいいから、彼女に笑ってほしかった。
お願いだから……。

そんな時に僕と彼女のことでもクラスが話題になった。
「知ってる？愛梨。愛梨って、こんな奴と付き合っていたのよ。覚

えてる？」

愛梨は僕のことをまじまじと見つめ、首を横に振った。
クラスメートのことは覚えているのに、僕のことだけを覚えていない。

神様、どうしてこんな意地悪なんですか？僕は神様に意地悪なことをしてはいないというのに……。

「そっか……。あんなに幸せそうに付き合っていたのに」
クラスメートの1人が結論を導き出す。

「愛梨はあんたのことだけ覚えていないみたい。不思議だよね。記憶喪失っていったら、大抵は全部の記憶を失うのに、愛梨の場合はあんただけ……」

僕にだって、そんなことはわからない。

彼女が僕だけの記憶を失っているなんてこと。

「でも……失った記憶は戻ってくるのかしら？」

そんなことはわからない。

でも、医師は「無理」という答えを出していた。

もう僕に、彼女と関わることなんてない。

僕に迫られた選択肢は「彼女のことを完璧に忘れる」しかないのか？

彼女はいつだって笑っていた。

絶えることなく、笑っていた。

その懐かしい日常が、遠い遠い出来事のように思えてくる。

あれから3日しか経っていないというのに、僕にはそう感じるこ
としかできなかった。

だから僕は……2度と、彼女に関わらないようにする。

彼女のことを、完璧に忘れる。

そう決意した。

彼女のことを忘れるようになって1週間。

僕の心に心境は何もない。

ただ繰り返される日常。

何も変わることのない、退屈すぎる日々。

彼女とすす、ということを失くした僕にとって、これほどまでに日常が退屈すぎるとは思っていなかった。

彼女がどれほど僕にとって大切な存在を占めていたのか、考えてもいなかった。

だけど、それは遠い昔のこと。

過去のこと。

僕はもう振り返らない。

彼女は、笑った。

何があっても笑った。

僕もつられて笑顔になる。

もう1度だけでいいから、彼女と笑いたい。

もう1度だけでいいから、彼女のそばに居させて。

僕が願う少しの願い事。

（後書き）

少年視点で描いた記憶喪失系恋愛物語です。

2008・10・27に加筆・修正をしました。

この話の続きは……読者の皆様の想像でお任せします。

2010・7・17：「It is by you」の長編を連載
しています。こちらからどうぞ↓[http://clover-m
ode.com/you/index.html](http://clover-m
ode.com/you/index.html)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7875d/>

It is by you

2010年10月8日15時56分発行